【日本の大学】第 37 回――横浜市立大学：国際都市の伝統・精神受け継ぐ

「国際都市横浜と共に歩み、教育・研究・医療分野をリードする役割を果たすことをその使命とし、社会の発展に寄与する市民の誇りとなる大学を目指す――」との、理念を掲げて、1949 年に、新制大学として発足したのが横浜市立大学（YCU）である。

この理念に基づき、YCU は「教育と研究の一体化を推進しながら、豊かな教養、豊かな人間性、倫理観を養う人間教育の場とし、『横浜から世界へ羽ばたく』人材育成と知の創成・発信に取り組む。また、市民をはじめとする地域社会から、本学の教育・研究・医療が必要とされることを存在意義と考え、本学の魅力を一層高めつつ、学生・市民・社会に対して本学が有する知的・医療資源を積極的に還元する」と謳っている。

鶴見キャンパス

以下、横浜市立大学のホームページに即して大学の歩んできた道や現況を見てみよう。

大学の源流は 1882 年に創設された横浜商法学校までさかのぼる。当時の横浜が日本で第一の貿易港であり、国際商業都市だったことで、明治時代の早い時点で商業学校が開設された。その後、横浜商業学校（1888 年）、横浜市立横浜商業学校（Y 校、1917 年）と名を改めた後、1928 年に横浜市立横浜商業専門学校（Y 専）が設立されている。この Y 専の設立をも

って、大学では横浜市立大学の創立年であると規定している。戦時中には、市立経済専門学校に改称したのち終戦を迎えた。そして、新制大学として 1949 年に商学部 1 学部で発足した。

商、医、文理の 3 学部に

医学部は、1870 年代に開設された病院が元となっている。横浜共立病院となり、その後、県立十全病院、横浜市十全病院など経営形態を変えながら、戦時中の 1944 年に横浜市立医学専門学校、同附属十全病院となった。戦後は、市立大学設立とほぼ同時期に横浜医科大学として設立されている。同大が横浜市立大学に加わったのは 1952 年である、その年には、文理学部も発足したため、商学部、医学部、文理学部の 3 学部体制となった。

1960 年代から 70 年代にかけては、大学院の医学研究科（博士課程）、同経営学研究科、経済学研究科（以上修士課程）などが次々に設置された。その後も大学院の研究科（総合理学、国際文化）などの設置が続いた。1995 年には、文理学部を改組して、国際文化学部と理学部が設立されている。また、2005 年には、商学部、国際文化学部、理学部の 3 学部を統合し、国際総合科学部となっている。

医学部

国際総合科学部を再編

最近の学部の発足、再編としては 2018 年にデータサイエンス学部を設置したことと、19 年に、国際総合科学部を再編して、国際教養学部、国際商学部、理学部の 3 学部となった。

これらの改革によって、文理融合的な視点で「課題を発見、解決する力」を育んできた教育を土台に、それぞれの専門分野における先端的知識や能力を研ぎ澄ますことによって、複

雑化する社会課題に着実に対応できる人材を育成する教育・研究体制が整った、としている。

大学は現在、以上の 4 学部と医学部の計 5 学部、大学院研究科は都市社会文化、国際マネジメント、生命ナノシステム科学、生命医科学、データサイエンス、医学の 6 研究科があり、横浜市内の四つのキャンパスとサテライトキャンパスに展開している。

国際教養学部は、従来の国際総合科学部の国際教養学系と国際都市学系のコースを受け継いだもので、多様な学問群の中から多角的な視点と豊かな教養を育み、確かな外国語運用能力と課題解決力を身につけ、現代社会や都市の課題を解決できる人材の育成を目指す。

国際商学部は、国際総合科学部の経営科学系のコースを受け継いだ。グローバル企業に必要な経営管理能力や新事業を創造する企画立案能力など「実学」を重視して、社会に変革をもたらすグローバル・リーダーを育成する。

理学部は理学系３コースを受け継ぎ、物理学、化学、生物学を基礎として生命現象を原子・分子・細胞・個体それぞれのレベルで解明し、融合的に物質化学と生命科学に挑んでいける人材を育てる。

2018 年発足のデータサイエンス学部は、ビッグデータから未来の芽を見つけ出し、新たな価値を創造するデータサイエンスのスペシャリストを育成する。

医学部は医療・看護の最先端に立ち、豊かな人間性と倫理観を持った人材を育てる。医学科と看護学科からなる。

すべての学生は 1 年次には共通教養として、専門教養の基礎となる知識、姿勢、思考法を学ぶ。英語によるコミュニケーション力を鍛えるとともに、少人数の演習形式を重視し、多彩な教授陣による専門教育と領域横断型のプログラムを進めることを、教育方針として取り入れている。

キャンパス全景

地域と世界をつなぐ

地域とグローバルとのつながりを重視し、（1）横浜というフィールドで課題を発見し、解決策の実践を通して地域や世界の問題を学ぶ（2）駐日大使の講演会や国際イベントへの参加など、横浜にいながら多様な国際経験を積むことができる（3）海外フィールドワークや留学、海外インターンシップで、世界へ飛び出し、自分を試す機会を持たせる――など世界に通用する力を身につけてもらう。

学生数が 5 千人に満たない規模であり、学生数に対して教員の数が多いため、教員との距離が近く、親身な指導を受けることが可能である。教養ゼミや Practical English、専門での演習など、少人数クラスが多く、能動的に学ぶことができる。

大学では、学術交流締結校である海外の大学に交換留学生を派遣、現在の交換留学先は 32 大学ある。各大学によって、現地語や英語などプログラムの内容もさまざまである。3 週間から 1 年間までの短期・長期の海外留学、海外大学との交流、現地企業へのヒアリングなど海外での教育研究活動を支援する海外フィールドワーク支援、世界各国でのボランティアやインターンシップ実習を行える実践的プログラムを用意している。

一方、外国人留学生が有意義な学習、留学生活を送れるような支援も行っている。学業支援では、留学生対象奨学金制度（授業料減免制度を含む）や、チューター制度（キャンパス案内、様々な配布物の読み合わせ、履修アドバイス、奨学金などの各種申請手続きの補助など）を設け、留学生が大学生活にスムーズになじめるように新入生にチューターがついて2～4か月間活動する。文部科学省の委託事業として、留学生の就職促進プログラムも実施している。

金沢八景キャンパスイチョウ並木・「時計台」

このほか、国際交流にも力を入れており、国際シンポジウム、国連開発計画セミナー、フランス映画祭などを開催してきた。ただし、この1年余りはコロナ禍の影響で開催できていない。

キャンパスは、横浜市内に四つある。最も大きな金沢八景キャンパスには、国際教養学部、国際商学部、理学部、データサイエンス学部と、1年次の医学部生が学んでいるほか、大学院の研究科も集まっている。福浦キャンパスには、医学部が集まり、附属病院もある。鶴見キャンパスには、理学部と国際総合科学部の一部などが入っている。舞岡キャンパスには理学部と、国際総合科学部の理学系コースや生命ナノシステム科学研究科などがある。このほか、横浜市の中心部のみなとみらい地区にはサテライトキャンパスを置いている。

大学では、2028 年に創立 100 周年を迎えるため、その歴史の足跡を振り返り、これからの厳しい時代を見据え、次の 100 年に向けて想いを新たに踏み出すための未来への誓いとして「YCU Vision 100」を打ち出している。

教育・研究・医療を軸に、次代に果敢に挑み、さらなる発展を目指すとして四つの重点事業を打ち出した。教育では、「ヨコハマから世界へ羽ばたく」グローバル人材の育成を、研究面では「世界をリードする」研究成果の創出と市民への還元を、医療面では「医療の知の創生・発信」として附属病院の機能強化・再整備を図ること。そして国際交流と知的資源を還元する拠点の形成を図っていくとし、「国際都市横浜とともに歩み、教育・研究・医療分野をリードする役割を果たすことをその使命とし、社会の発展に寄与する市民の誇りとなる大学となることをそのミッションであるとうたい上げた。

学生数は学部が 4271 名、大学院が 868 名の計 5139 名である。このうち、女性の比率が高く男子が 44%、女子が 56%となっている。(2020 年 5 月現在)、教員は専任教員が 778 名（2020 年 10 月現在）である。

令和 2 年度卒業式

学長は、2020 年 4 月から相原道子氏が務める。横浜市立大学医学部を卒業、医学博士、2008 年から横浜市立大学附属病院皮膚科教授、11 年、横浜市立大学医学部教授、附属病院

副病院長、病院長を務めた後、現職。専門は皮膚科学である。

日文：滝川　進

写真：横浜市立大学 HP & FaceBook